

442
十
21

四
十
九
出
洞
路

十一



雲從生羽路

十一卷

平鹿郡

雪けりてはら

やこのみ

醍醐

本所

多は下樋口邑

中のま

梨木幅

邑

このを深間内邑

里のおは

石成

邑

まづ上吉田邑

あの中

馬鞍

邑

松の客殿薊谷地邑

さの崎

新藤柳田

邑

萩井芽上樋口邑

さく

外目

邑

秋田縣立
横手分館

登 6516
函 442
番 21

平鹿部 醍醐村 里長 周助

大正拾五年三月拾八日

醍醐村 里長 周助

醍醐ハもと山城國あり醍醐を慕^{カウ}きて名づけられ地トイはら
 さいも醍醐帝の御代小草創^{コウ}りゆゑりつる愛宕といはれ諸^{モロ}
 事之伝^{ハレ}典乳味酪味生蘗味熟蘗味醍醐味をいひて牛乳
 乳汁と割^ワ菓ハ甘露を成るそは醍醐といはれ名ありま
 石持^{イシモツ}ふ小草り其草のから名も醍醐^{カウ}菜ともいひつる
 其車^{クルマ}櫃^コ車長持^{ナガモツ}ふ番と秋田の邊^{ツバサ}よりそはなはれともそは
 其庫^{クラ}の義^{ヨシ}や地陀伊基^{チタイキ}名小鷹^{コタカ}る雉^{トリ}もさ海^{ウミ}の品類^{シナ}はなはれ
 考^{オモ}ふに倭名鈔^{ワナショ}に平鹿部山川大井邑和山本郡塔甲御船鑑刀
 餘戸^{ヨロ}とありま此平鹿部の内々山本とありま山本郡のつげ
 ね今^{イマ}の印本^{インホン}ハ郡字^{クニジ}ハ脱^{オト}して山本塔甲といはれ塔甲といはれ

山本郡小在^{ミナモト}れど其條^{クダリ}に於て書混^{カキマゼ}れど醍醐ハ塔甲^{タカカ}と云ふ所の
 言^{コト}語^{カタ}入^{イレ}聲^{セイ}小^コ道^{ミチ}と云ふ^{イハレ}方^{カタ}言^{コト}り^{ハレ}一^{イチ}歴^{レキ}朝^{テウ}詔^{ニョウ}詞^ジ解^ゲ三^{サン}卷^{クワン}第^{ダイ}十^{ジュウ}八^{ハチ}話^{ワタシ}
 出^デ羽^ハハ和^ワ名^ナ抄^{セウ}ハ天^{テン}波^ハと云^{イハレ}り其^{ソノ}外^{ソノ}も昔^{コノ}の物^{モノ}ハ皆^{みな}然^{しか}あるとい^{イハレ}て省^{シヨウ}きてで^{イハレ}ても
 又^{マタ}ハ鄙^{ハツ}言^{ゴン}ハ小^コ勝^{ショウ}印^{イン}本^{ホン}に小^コ字^ジと脱^{ダツ}し勝^{ショウ}字^ジと膝^{ハダ}小^コ誤^ゴり一^{イチ}本^{ホン}も小^コ勝^{ショウ}と有^{アル}り今^{イマ}も
 又^{マタ}ハ一^{イチ}本^{ホン}小^コ依^イき^キ和^ワ名^ナ抄^{セウ}と雄^{ユウ}勝^{ショウ}部^ブと字^ジ加^カ知^チ謂^{イハレ}之^ノ答^{コタヘ}合^{カフ}之^ノ雄^{ユウ}勝^{ショウ}部^ブと有^{アル}り答^{コタヘ}合^{カフ}誤^ゴ
 字^ジと云^{イハレ}り一^{イチ}り醍^{テイ}醐^ゴ東^{トウ}ハ馬^バ鞍^{アン}西^{セイ}ハ五^ゴ野^ノ南^{ナン}ハ梨^リ木^キ河^カ湯^{トウ}共^キハ上^{ジョウ}樞^{シュ}也^ヤ醍^{テイ}醐^ゴハ浅^{セン}
 舞^{マヅル}共^キハ湯^ユ澤^{ザク}ハ三^{サン}里^リ横^{ヨコ}手^テニ三^{サン}増^{ゾウ}田^{デン}ニ里^リ子^シニ村^{ムラ}の西^{セイ}ハ佐^サ渡^{ダツ}川^{カハ}此^{コノ}水^{ミヅ}と云^{イハレ}ふ名^ナと云^{イハレ}ふ
 中^{ナカ}ハ小^コ流^{リウ}あり此^{コノ}源^{ゲン}ハ梨^リ木^キ幅^{ハタ}の中^{ナカ}の沸^{ナレ}寒^{カン}泉^{セン}と云^{イハレ}ふ同^{ドウ}村^{ムラ}に在^{アル}る亦^{モト}有^{アル}り清^{セイ}水^{スイ}と云^{イハレ}ふ西^{セイ}流^{リウ}
 の落^{ラク}合^{カフ}ハ又^{マタ}此^{コノ}醍^{テイ}醐^ゴハ大^{ダイ}沼^{ショウ}と云^{イハレ}ふ大^{ダイ}沼^{ショウ}の水^{ミヅ}と云^{イハレ}ふ小^コ沼^{ショウ}ハ入^{イル}る左^サ戸^コ川^{カハ}の末^{マツ}と云^{イハレ}ふ
 と云^{イハレ}ふ昔^{コノ}ハ小^コ沼^{ショウ}と云^{イハレ}ふ狭^{セア}戸^コ川^{カハ}の末^{マツ}と云^{イハレ}ふ小^コ沼^{ショウ}ハ金^{キン}狭^{セア}戸^コ川^{カハ}と云^{イハレ}ふ此^{コノ}

左戸川の流の末に此醍醐といふ所ありて海路の道川谷敷谷地中吉田
上吉田深間内上通にあつ七色より十町田よりかへいり
享保郡邑記より醍醐村家貢五拾軒二今七十三丁支那野中
村家貢十軒寛文四辰年より此村始笠田村日土軒多賀谷左兵衛殿の高上り地成り思ひ出す村なり佐馬村日四軒形部
村日四軒寛文三子年始石成村日拾六軒あり又々々今も享保うむりい
こゝにて野中村の家六戸笠田村中笠田村西村合十一戸
佐馬村この一村よりこれを知れど御公地といふ座村あり此村を佐馬村
にいじりていふ此御公地なる故村上吉田よりして座邑あるごらち八郷
グダ
はと事やわいふことあわれみ派てごらちと云ふ今の字々莫年て由る地
と云ふものありあは邑知ありて古名にすぎず前にも此事いふが醍
醐ハ塔甲の誤り御公地とも邑知の謬りとせばある事一の誤をどうに近きむ

形部村家四軒此邑今云ひ下村に於て醍醐本師の西に在り其
じり野中形部より人の創り処といふその末系伊勢とてある野中
村との由來より上醍醐村家七戸醍醐石成家居入會あり此邑享
保日記に見えむ古城跡あり此城主馬鞍の城主の二門ありむり馬倉より村
よりいづれよりあるわけは馬倉能登守同右兵衛尉同宗今同進殿座を
とあり馬倉統多馬倉の戦ひの物語と馬鞍のことに委細は誌として

神社

神明宮羽場野の内鎮座社地いりむろく杉杉こも本も
せし文てもいりり祭日六月廿日未社神あり別當増田金剛院
金毗羅神秋葉神祭日共二月廿日別當並同上此八月の廿
餘日を延宮あり木工等鉦も音響を傳へたり良材あり

とこぶり人さし今みちうち群を饒へ此神前の垣の坂下石
井ありみちの清水とてい清水

野中稻荷明神

野中村に在り

別當増田金剛院

櫻町稻荷明神

上醍醐村に在り

別當並同上

字地

古館下々

さくし町むり極あり

追散し

古戦場ありてうづまき
名の残りけるものあり

塚の下りいりり人の塚とて人あり

長泉寺

廣藏山長泉寺本山と増田の満福寺則本山の閑居地ありとて
一佛刹として平僧寺と成りつ同祖と満福寺の四世在天鑑富大和
高り二世通用話達三世天皇傳青四世白菴林龍

野良敷系と草創の孫と由利良父の養父ありて
御高き入り地七千二百廿九坪其間数東西六間南北百
廿拾九間御高札面堅百七拾五間横上六十間下百七十三間凡二萬百廿
拾五坪是が文政五年戊午八月此地の地高残り無き時郡
方へさし上るふあはるゝての枚苗四万本と及ぶとて
とせりしやうれ移さば廣野とせむ

度余紙漁の家ありその創め享和の頃最上北
新庄より五ヶ町といふ所の末の楮本より此事を此里の人ふ
とて反をも此の頃よりと由利をばめりし永吉の
文化元年の春みらの東山の作生津村万吉の家より羊紙大方
あり海あり三とて経て取きて今と四十餘歳といふ紙を某より

海より得て今よりは上毛とてあり

神社

愛宕護山大権現 余日六月廿四日八月廿四日此は延喜寺別當増田金剛院

稻荷社末社御神

その此於多岐の杜と古と虚空藏の杜と其の由来より
天正文祿の世より皆瀬川とて流てそのまを三浦和久所
為宗といふ武士より死す此三浦為宗の念持佛ありて堂を
建つてそよりみの人より福満の祠といふまゝといふ泉堂
衛門といふ人此地の水田創鑿のとき田畠守護の地神とてこ
ろの本居の地神と鎮まりて此杜より祭らば虚空がさつハ地主社
小を所よりけれどそのあつハ今といつハなく所よりある

あるとふ記しるハ當村之鎮守愛宕山地藏大權現之尊像者久
保田住人今泉氏奉造建之中頃矢却而新彫刻聖軀再仰欲興
起忽^ト之千点眼即向神前所祈施主靈檀越武運長久當處
領司同氏家門安全至祝不盡某作偈云 金錫橫飛遊六道
妙音普振度生拘打開無盡藏中去手裏寶珠幾與人現
長泉大嗽稿と記して年号ありつきの世に僧とや
寒泉 愛宕社に住還道の西に在りおぎの神ありしと云
大池あり皆瀬川の古川と人あき促^{サナガ}して田のふく作れり
古木の梨子樹むろゝとて河流れも河原の梨あり船繫り
やよその木ハハの池の中かゝりて今と河なりとて梨木村名
あり此舟繫ぎの梨子有るもていふやあり

伊藤殿の松 伊藤甚左門と在り伊藤某といふ事時代本
小萱やうはうなりて家禄もや極り伊藤やうと庭松ありとて
歳の始に注連^{トシナリ}りて神酒をひ神燈^{ミツアサヒ}もて尊ありとて事あり
ふむせ川ふりり死せり三浦太左門為宗と金澤陣のとき三陣
ハ三浦平太為次三陣ハ鎌倉権太左景道四陣ハ三浦平左為
道とて中々とて為宗と此三浦統の末胤ありとて

古谷字地

沖の野 坊主畑 中鴻 中野 狐澤見 是と

沢見といふはくむと年や経ぬとて長^サの喜藏とて牡狐有て
村々幸あり事あれば數れり千と狐ありとて燭ぬとてと
白松明といひさかり雄勝郡の松園の五月宵の藏王山の齋夜の

家員二拾五戸

人員二百二人

馬十疋

寛政五年癸丑二月
天壽院公 義和公の御下を以て
北より南へ
梨木羽場と云
つむあり
此君より二月廿一日
あつて心よりふかち人の岐ふ
りていふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふ
仁徳とありふふふふふふ

増田十文字邑
北より南へ
梨木羽場と云
つむあり

寛政五年癸丑二月
天壽院公 義和公の御下を以て
北より南へ
梨木羽場と云
つむあり
此君より二月廿一日
あつて心よりふかち人の岐ふ
りていふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふ
仁徳とありふふふふふふ



北

南

○梨木羽場邑

南

甲梨木幅村よりハ
此池より古川の海へ
新野の梨木とて大樹あり
村の名ありて其木を
池の底に朽てあり
此池と三十五石の田面ふ
うふふ上へ

東



愛宕山^西はりて村の本居の神
と今も沙杜の内ふ 稲荷ノ神
けや^赤おさぎの神のこころ
清水あり其木沖の野にふ
田面ふふ

北



梨木幅八辺世紙源業ありて
 大方羊紙がまはらとまゝ云々
 いふまゝとつて秋と葡萄が西ミナ
 産り房大ふりて甲斐國の産物を
 考ふまじりき紙はまがたゝの
 竹生疎ふまがびて東山流
 村ふし樹を家あり由陸氏の某
 園とありて秋の子名を蹴蹴
 吉野の苗とくくゝゝゝゝゝ
 西の秋あり此秋ハむゝゝゝ
 とむから辨財天を参りて其まゝ
 うゝゝゝゝ秋のむゝゝゝ
 淨慈寺の清水より小徑のゝゝ
 りゝゝ



佐佐木加美の初より此神の御事ハとありふ
 ういゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 五事記ハ船戸神とありて書紀ハ岐神とありて口災
 算系疏ハ船戸神とありて道祖神とありて道祖
 神ハ漢國の俗を以て當りてゝゝゝゝ船戸神ハ當り
 たりハ古くハ岐神の名ハ布那斗と道祖神とありて
 佐々抄ハ岐神とハ別ハ船戸神と道祖神とハ
 岐神と同一とありてゝゝゝゝゝゝゝゝ



め

○又々南門清水

あらむー

新田の場ふ

ふふあー

あー

あー

あー

新田

さー

さー

さー



甲愛宕清水の水

ニ流る

乙又々南門清水

中の市

あー

あー

あー



東

西

○ 御憩寒泉

オヤスミシ
新木村に存むる一ノ木ありて

酢川の清水と上り一般寺と下り

妙法あり

中の寺法あり

と

甲 清水改

乙 御上段

丙 西御路



甲 醍醐邑
 乙 神明宮
 丙 稻荷社
 丁 石寒泉
 大沼
 己 左戸川
 庚 成邑
 圖

東

乙

丙

丁

己

西



甲 醍醐の幡野の神明宮の
 所前乙大沼丙佐戸川
 臨て丁東島海嶽戊西
 多海嶽己湯沢の市嶽
 庚院田の甕が嶽が
 見アきく
 け



甲 石成邑 醍醐石成邑
 松多木うらつきあす
 糸木幅るるるる

丁 神明杜り 大沼

巳 神憩ノ寒泉

庚 赤多馬門 清水

辛 公地邑ノ跡

一 一 一



石成村

里長 吉郎兵衛

郡邑記 石成村家員ニ拾軒 今世ミ拾 此村正保四訂年馬鞍

村より分れ其節澤山トス山で御付置ハ一馬鞍村 醍

醐村入組の処ニモ見之枝御関合村家員或拾軒 今拾 街道ハ

大橋ある故小名ニモ見之明澤大橋此ニ村今廢邑

湯澤より横久保田へは横街道ハ村より石成へは首領醍

醐村より属此邑より直小東西の方小入小路ハ是ニ石成の本村ハ

さりけれど醍醐の石成の家並本石成の家三四戸ハ入り交りて栖

石成ハ酒造肆ハ忠助よりそ親ハ者ト下境村の新處ハ

此地ハ家柄高橋武左門ハ今市ニ武左門ハ世久保田ニ移りて

今其家とのひよりその忠助ハ家ハ記禄あり石成村ハ正保丁年馬

鞍村より高七白石の水田より分村多き邑其世の村の家貢五十軒
あり人馬も高七の村あり延享のころより米の價高て
下直二万氏に於て困窮なりて天明三年世間並て饑饉成てあり
しゆさるるに田畠の多くを棄て葦藎ありたり野山に
如く村の家貢五十六戸計にありて後米の價高なり
そなたより下境を武太門より作てなりて南部津輕より
来ける退散人を数拾人より抱へありてききに奈田堅くは武
太門の名代てきき金中忠助此石成より移りありてしり野
良や草創耕佃りて奈家門を興て土氏より来集りて前後四年
のやうなりしものとて小成程に寛政二年國司公江戸より
申しし頃小島所の作てありて文化七年より二十三年より

ありて公卿上下のおひ成の時古なりしとてあまの上下
まむい酒をとりて進めまむい家よりあり
むんぐにせまむいふらきとてしけき此中宿の市免
ありて今にありていふ事なりといふなり
やうに太神宮よりしりしり太社稻荷の神と正
一位とありし事なりといふはしりしり

神明宮 新築事ゆゑ成就しり此神殿より
齋奉る祭日四月十六日齋主高橋忠助別當馬鞍村行正院
正二位石隆稻荷大明神此神社古き藏明神とありしり
地主の氏神とありし文化年中より氏位を奉りしり

此願主忠助 祭日七日二十日 別當修驗馬倉村行正院

船戸神 後援の道の傍にまき

八幡宮一郷の本居と称する此神社は馬鞍邑に鎮座す
馬鞍醍醐石成三村と此八幡宮と生砂神とあやびする

字地

二股 桶清水 千代子 あづり川 寺中き 四ッ屋

大橋 きの新淵 小関合 枝御開合村 今ハ家貢世軒 郡邑

記小明澤とありハ明澤境村あり 今の所々人唱ふ地村も東

ユ中より馬鞍の八幡の縁起に石成米を貯へてより其米庫の跡や

石成本郷

他家貢三拾九戸 人員貳百拾八人 馬十九疋

○石成邑鎮守

○神明宮○石隆稻神

會殿小齋

よりきり

此とやとあらと
新淵とて 古河に
海とて東北に斗
小古寺の海河其寺
醍醐邑小つす
今ハ禅林長泉寺是
むハ保長やきり
存ハとも田畠



馬鞍村

里長 奥治兵衛

此馬鞍ハいり、舊き邑なりて石成醍醐チロと古コこの馬鞍村
分邑ワケなり村トコロといふ享保郡邑記キ云馬鞍村、家員四
拾貳軒三嶋ト云處正八幡社アリ真跡鞍ノ由其故コト家リ馬
鞍村ト云支御阿弥陀田村同三軒先年ヨリ阿弥陀堂アリ其唱ウタ家
ル澤山村馬鞍村一郷水上土地山有リ運上銀三拾目指上同村
薪山新野目山相濟ニ家村オ、神山ト云山御礼山ニ山守家ニ
軒石山、邊ハ引越ス支マリ今ハ四軒家員ト成ル三嶋村家拾一軒正八
幡社有リ醍醐村石成村の産神由ニ道中村同五拾四軒金屋村
同廿四軒白山田村同四軒白山權現社有リ白山田ト唱ウタ云々ト見ミえり
某田ナニデム日亦田クレデムとて神田カミタ七田ナナタとてツツけふその七田水仕ミヅナシ七清ナナシヅメとてツツめく

千谷^{サム}庄^{サウ}よりまの里をへ此まづらの河よりとていふより
柞山嶺、嵐坪、卷小馬鞍故城、小野寺、臣馬鞍能登守
同右兵衛、邑食も湯澤の住楯岡満茂と小野寺義道が戦勝
處、支城河熊植田今泉鍋倉兼田同、五城を攻拔満茂三千の
兵を率へ岩崎増田古内の間小陣を取、四月十九日馬鞍に推寄
ル此城大山より後、山に深山小儘き、誠小絶城、馬鞍に防戦の
度度より相へり寄手堀裏に付き一回く来り入るよりとき
城中より玉矢を起し敵多く討とり此處合城兵憤戦を寄
手大敗り岩崎より崩れりより原田大晴明日一番小戦む宵
より拔掛しける馬鞍城主は敵に遠引より幸に橋手の城につ不
し下所小成て戦ひて女を率て先へ退り十六騎殿りて行りし拔掛

の湯沢勢小必合大に就小馬鞍兵十六騎討れ四騎引退くと追ひ来
る馬鞍の土民第太郎長柄二三人身あをけるで以て敵を三人
子で突落し山崎藤重郎第太郎と組打し首を挿る大將
右兵衛も小栗宮内小討取る満茂兵を率て来りし岩城
小より伊良子將監と兼の道きけり翌年植田河熊新田目鍋倉
並八柏城を攻拔義道一族馬鞍城を攻返じ大森西馬音
内等と始の諸將兵卒を率て攻けし湯澤満茂は敵小八方と
遮られて出ず事ありて城主伊良子氏大敗近習十二人従ひ
岩崎の方へ之をける半途にて田子内の臣磯野五右衛門 菅ノ
孫八郎小討れける先城主關口より能登守の再び居城成る
より正八幡ありきより當社の由来を尋るに人皇五十一代

平城天皇御宇に當りて出羽國雄勝郡切畑山に阿豆王といは惡
鬼栖て人氏を悩ましけり武將坂上田村將監より小野良
實案内して巡見し余仙谷莊中誠一無雙の靈地なり將軍
これより一塊の土を封じて壇を築き幣帛を捧げて伊豆國三嶋大
明神に勸請ありて祈誓を祈給ふ神靈納受おけし惡鬼阿豆王
を速に退治し是より依て神領として七田を寄附りて仙谷莊に
三嶋御領と稱し其後治暦三年丁未四月十日御氏集りて此地に八
幡宮の一社を建立しをいへ二十餘年と経る寛治三年己巳年
清原武衡家衡を追討の爲め將軍義家朝臣當國へ下向り
將軍処の神社へ願文奉幣ありて武衡家衡を終ふ討に一同
六年義家卿凱陣のとき當社八幡宮へ御馬の鞍を奉納ありし事

依て馬鞍村と名け社中より大なる櫓あり辨度此の文字と
書ししものも慥に知らるなり其のち後醍醐天皇の御宇に當りて
五畿七道に勅命ありて諸社に一所あるべきに此事國に至来り
そのとき當領主関に能登守信忠勅命ありしにひて神社に
一處あり即ち三嶋大明神八幡大菩薩廣田大明神是に達
兼庄を改めて醍醐と名附き米穀を貯へ置しを石成
と名付し是よりして馬鞍醍醐石成の三村とて今まで
三神を尊敬し祭祀も事なりとやされ湯沢豊
前守能登典膳柳田城を攻め抜き大森城強して飽みぬ
其間馬倉城を攻む能登大將よりして伊良子武部同新
藏を副て慶長五年十月二十三日小白け城を圍口能登

守再住の城をきく衆一呼して城を持互ふ玉箭と飛一攻
余之伊良子春熊回新藏先兄和州此城を討つ誠敵之
今宵城の後へ廻りて火を掛むと忍びて乾堀に居る
城方関は九郎幸で連て要む廻りけるがその夜見て
鉄炮を打之鎗合ひ一遂に春熊新藏も討たけり城
主城の後火の手を上ると寄手ハ伊良子氏火の手の功
めむと備て乱して来り入むと城兵巧み事なれば
三方より玉箭を打かけ山の腰を廻して敵の後を遠く我
いゝば最上勢大に敗れて増田岩崎まで引取こころ見え
えゝ此いゝ物法ハ九永慶軍記に纂るるものなり
關は氏ハ本姓依本の統めづるものにつづるものなり

馬鞍能登守同右衛門尉同宗助同縫殿右衛門名もハ永慶
軍記に見えり増田村の廣田社の神官高階氏の家系譜ハ
八代目ハ高階左京父宣喬ニ女摩倉兼春室ニ宣喬文明二年庚寅
五月二十日卒より馬倉統ハ代ハ能登守ト云ひつゝ後醍醐帝の時代
小勅のまか諸社で一地ハ遷集するハ能登守信忠といふハ元亨
正中嘉暦間の世の人なり馬倉九郎兼春ハ文正應仁間の世ハ
馬倉信忠の孫なり當き其後胤りて今南河川村関口
氏ありといふ此馬鞍の村ハ石田坂氏ハ永慶軍記廿三卷ハ
難登典膳ハ郎達高橋第五郎同第三郎一陣ハ来り出で城
ハ石田坂右衛門三郎とて鉄炮の上手なり物の隙に懸い寄り越
小勅ハ其無慙や第五郎ハ胸板をうち貫れ馬より下に落ちけり第三郎

馬より飛下りて川に身を懸て敵を討つ所を石田坂又鉄炮
で掛けハ今度ハ兄弟ともかくも費れ遂に其處にて死かけり
と石田坂ハ林蔭村の北の山隈に松原山の内にて亀井源
氏といふ大谷路をむく家居も有りて石田坂右衛門二郎も住
み又石田坂ハ勘兵衛和右衛門とてやえし者ありしその和右衛門
いふは後ハ勘兵衛が末葉ハ其處にいひて林蔭村ハ今住り右衛門
治郎が後ハ絶え其處に老農二郎も未だありてありしといふ
又林蔭村ハ四郎丸門といふありて最將軍子吉内藏之助澤田馬を乗入きてい
むと柳法水の丹今古馬といふ勇力英雄の男あり子吉内藏之助を討つて丹今
古馬を其處に合ふといふなり其後ハ林蔭村の丹四郎丸門にけりといふ
鬼火青く燃えいふ
と助が之を電燈にて照らすと夜に柳法水のやうな鬼火青く燃えいふ

三嶋村

此村ハ三嶋神と齋村といふ村の名ありて昔ハ三嶋といふ所あり
津國伊豆伊豫の間にありて名高し伊豫國三嶋の日本惣鎮守三嶋大
明神の額と藤原依理卿筆ハ三嶋神と書紀ハ伊豫諾斬斬遇定智
為三嶋其一二為大山祇神と見えりて延喜式ハ伊豆國賀茂郡
三嶋社攝津國嶋下郡三嶋鴨社伊豫國越智郡大山積社
此三社皆
大山祇神三嶋ハ幡廣田神神御會殿ハ三柱坐り

三嶋大明神大同弘仁のころ大將軍從三位坂上大宿禰田村磨
の伊豆の三嶋といふはつきの年より地主のおねと村
ハ幡宮陸奥守兼鎮守府將軍源義家朝臣山城國男山
の所神といふといふて凱陣のとき君が志津館と神殿

奉内給ふり三嶋の御馬鞍よりいづれ

廣田大神宮撰津國廣田俗号奈天照太神也日本紀天照
太神誨神功皇后曰我之荒魂不可近皇居御心廣田
國即山背根子之女葉山媛今奈之ちよりいづれ此三
柱の御神馬鞍醍醐石成三村の鎮守と尊まつれり此
三柱の柱の束の隅より小古槻一本オホナギ義家朝臣の
箭止の槻より帝敵陣あわじ復奈のより征矢あまの射きて神小
手奈給ふといひまゝ一本の大空樹槻ナニナ周圍十六
あり圓居してはくやうどやうど安永二年至己丑月九日の夜風
あつて自然より本僵カタまりあり其音雷鳴のごとくつり古老の
物語あり其槻の枝より造れる三斗檜ツヅ木付あり雲文玉とありあり

七社 七田 七清水

藥師佛社 舊田といふ二萬石の稲田三清水社の押方ナリ在り
神社ハさうありて千町の中路の傍小細本の雞栖ニキ立り

無量壽如來社 あゝ田といふ八千石の稲田二つあり田の村中三清
水あり長太郎といふ家の傍小涌きづる泉あり

多門天社 五千石の稲田を佃り毘沙門田といふりの本ありとて
たりしていづれ誤り清水と社の堅の方小在り

地藏社 道中村に在り道中田といふ五千石の稲田之此まの
清水と村中の泉といふ

八股大蛇社 八十九將田といふ四千石の稲田あり石井神室
あり此南に清水あり此泉むろといひ深くて大蛇すめられこり

ありはさしに波来人ありて人々病みて必しけしは神のいり
 しが雷で八面大衆神と鎮め齋をけるまやとありたり
 白山姫社あり山田といふ此田二十町計を佃といふむろい家戸
 の村に其村跡小山の中清水いそり湧出そのいそり源義家將軍
 金沢の柵割陣のときと湧く大鳥山今ふのの八幡ありて大谷の
 山路を経て此菊理媛社なり三嶋の三槻社の御陣所小着き
 給ふるもといひるまふをこゝ其世の古道ありて寒泉ありけるこ
 阿摩釋迦社ありまのさるめをどののうへりひとありは波出の
 峯小藏王社あり神田といふまの田といふて十四町あり清水は此山
 の林あり存りて野々墓といふや金峯山といふ古今皇代圖説に
 宣化天皇三年和列金峯明神出現と世に称安閑天皇之霊と

延喜年中沙門日藏入此峯見藏王菩薩ありてとあり

さうけるもといひて藏王宮あり山といふふまれこれ金峯山といふ秘あり

大山社といふ多し。房山の山神齋主 三郎左門 甚た工門

澤山の山神 齋主 仁久 田子の神出の山神齋主 仁た工門

道祖神山の山神 齋主 傳ち馬 松原山の山神 齋主 喜惣右門

城廻りの山神 齋主 仁兵衛 鬼澤の山神 齋主 作左門

鬼澤の山神 齋主 典吉馬 山守 二戸 平林山の山神 齋主 市郎左衛

鬼澤の中道の山神 齋主 四郎左衛

稻荷明神社

長者森正一位稻荷大明神社 齋主 本林田氏 元朔

除茅稻荷正一位大明神 齋主 柿崎氏 典治兵衛

その外も大山神社より稲荷社多しと云つた事を挙げて記す
また三河の神の縁起として一冊の書ありて卷末に参議正三位濟能
とあり此郷の氏作也その意凡作山と云ふ處に似て坂上田村將軍
と藤原俊仁將軍とて二人の如し書きてその事柄の多しを云ふ
いり多しを云ふは有て此處に記す三嶋の村に齋なり三柱の外に稻
荷の小祠ありまた三社の市神といふ事ありける杜ありて
人並八幡宮といふ稱へするといふ此杜は八幡太郎義家將軍
の御陣營のありつゝいふてありて今に世に傳へてまゐるはふこと
あり此神事ハ三社の法神とて並て六月十五日八月十五日祭する別當行
正院ニ 三河村家貞享保のむゝハ土軒今ハ十五戸ありける

道中村

此邑家員古五拾四軒今ハ廿六戸あり東ハ三嶋西ハ醍醐村ハ中にも
この村は道中清水の事ハ前ハ七清水の件ハ委曲ハ祿一とあり

柳井村

此村よりハとありふ多し家員四十二軒今五拾戸あり一城廓の
ありつゝ世ハ此邊より外廓ありけり山陰ハ横手山内の
武道村西ハ三河道中南ハ河津院田大谷村此邑の舊家の事と
ハありふといふ今ハ村として馬鞍と云ふ事ありいり此村の山田と
さうのいせといふ甲斐のくさし郡の郡といふ郡内と云甲府と甲府と
いふことあり要する事と云ふ事と云ふ事

澤山村

澤山ハ澤家七軒あり郡邑ハ馬鞍二師の水上山といふ澤古ハ家員廿六戸

ありて今も古城山下の村に計世最上の寄手第五郎并三郎兄弟ありて
石田坂の馬治郎鉄炮にて堀越がうらたじとふ所の外堀も今も田より古きの
物造る金堀馬治郎長率十五澤ありとふ処あり十五堂のどけりて家
かユナありといふ孫吾南仁人かといふ古き者ありて孫重郎とてやき
男の親の者の代りて三代の阿孫陀田の正保のころより今も孫十郎境内
とていふていふて孫のこの孫十郎が方より一かやうに乱心ありて二十計ありて
くらひありきとて孫十郎より人足ありきとて三十計ありて孫十郎
の妻は武道の山守のわうとて来る婦人ありて夜あて女房の母大病にて今
は死ぬといふが娘は目會いてそれとて世のありひもせんといふていふて
か来たといふて門よりけりて女房よりあきとておのれあきとて出たりといふ
孫十郎夜あてりといふていふて送るいふていふて女房よりあきとていふていふて

む孫十郎よりいふていふていふていふていふていふていふていふていふていふて
親の家よりいふていふていふていふていふていふていふていふていふていふて
来るいふていふていふていふていふていふていふていふていふていふていふて
やいふていふていふていふていふていふていふていふていふていふていふて
本章に纏いてあつていふていふていふていふていふていふていふていふていふて
て孫十郎よりいふていふていふていふていふていふていふていふていふていふて
利藩を磨きとていふていふていふていふていふていふていふていふていふていふて
ていふていふていふていふていふていふていふていふていふていふていふて
前よりいふていふていふていふていふていふていふていふていふていふていふて
頃ふ人いふていふていふていふていふていふていふていふていふていふていふて
畑の根よりいふていふていふていふていふていふていふていふていふていふていふて

登りてふちとて空をむひて龍^{リウ}を叫^{コウ}び空をくちて其^{ソノ}まゝに
人の田^タ島^{シマ}のや雨^{アメ}ふちある年の夏^{ナツ}大^{オホ}旱^{カン}天^{テン}て人^{ヒト}はけき谷^ヤ地^チ八^{ハチ}村^{ムラ}
の人^{ヒト}挙^アりて海^{ウミ}山の海^{ウミ}十^{ジュウ}郎^{ロウ}あそきて酒^{サケ}さうりて海^{ウミ}十^{ジュウ}郎^{ロウ}か雨^{アメ}こてあそ
びててちか類^{ルイ}のばさばさて葉^{エフ}竹^{タケ}ふちけいふち所^{ショ}獄^{ゴク}か登^{ノボ}れ山^{ヤマ}伏^{フス}あまき煙^{エン}吹^{フク}
いて獨^{ドク}銚^{シウ}花^カ四^シとち雨^{アメ}頭^{カウ}中^{ナカ}か篠^{シノ}掛^ケ神^{カミ}てまうふいふちをちて
香^{カウ}とちゆて雨^{アメ}このいのちけうか海^{ウミ}十^{ジュウ}郎^{ロウ}も海^{ウミ}十^{ジュウ}郎^{ロウ}も山^{ヤマ}伏^{フス}ち見て海^{ウミ}
十^{ジュウ}郎^{ロウ}ハあふちのちりあそびて海^{ウミ}十^{ジュウ}郎^{ロウ}これハ谷^ヤ地^チ八^{ハチ}村^{ムラ}の人^{ヒト}ふあそびて
雨^{アメ}こふ東^{トウ}さふふちて山^{ヤマ}伏^{フス}雨^{アメ}ちりてあそびててちりてあそびて
けうか山^{ヤマ}伏^{フス}此^{コノ}夕^{セキ}ぐれハ降^フてふちけうか海^{ウミ}十^{ジュウ}郎^{ロウ}も海^{ウミ}十^{ジュウ}郎^{ロウ}も山^{ヤマ}伏^{フス}ち見て海^{ウミ}
十^{ジュウ}郎^{ロウ}も海^{ウミ}十^{ジュウ}郎^{ロウ}も朝^{アサ}時^ジふちて海^{ウミ}十^{ジュウ}郎^{ロウ}ハ雨^{アメ}ふちてあそびててちりてあそびて
ふちりて海^{ウミ}十^{ジュウ}郎^{ロウ}も海^{ウミ}十^{ジュウ}郎^{ロウ}も山^{ヤマ}伏^{フス}一度^{イチド}ふちてあそびててちりてあそびて

か一^{イチ}実^ミやあむあばいのち空^{ソラ}あそびて雷^{ライ}鳴^{ナリ}てあそびて雨^{アメ}ふちて
あそびてあそびてあそびてあそびてあそびてあそびてあそびてあそびてあそびて
谷^ヤ地^チの八^{ハチ}色^{シキ}ハ車^{クルマ}軸^{ジク}と流^{ナガレ}て雨^{アメ}二^ニ日^{ニチ}もあそびてあそびてあそびてあそびて
海^{ウミ}十^{ジュウ}郎^{ロウ}谷^ヤ地^チ八^{ハチ}村^{ムラ}のちりてあそびてあそびてあそびてあそびてあそびてあそびて
田^タの面^{オモテ}もあそびてあそびてあそびてあそびてあそびてあそびてあそびてあそびて
か海^{ウミ}十^{ジュウ}郎^{ロウ}一^{イチ}反^{ハン}とあそびてあそびてあそびてあそびてあそびてあそびてあそびてあそびて
節^{セツ}と持^{モチ}りける前^{マエ}垂^{タリ}ふちけいふちあそびてあそびてあそびてあそびてあそびてあそびて
一^{イチ}貫^{カン}の海^{ウミ}のちりて海^{ウミ}十^{ジュウ}郎^{ロウ}も海^{ウミ}十^{ジュウ}郎^{ロウ}も道^{ミチ}とあそびてあそびてあそびてあそびてあそびて
空^{ソラ}てあそびてあそびてあそびてあそびてあそびてあそびてあそびてあそびてあそびてあそびて
食^クいける外^{ソト}もあそびてあそびてあそびてあそびてあそびてあそびてあそびてあそびてあそびて
祖^ソと越^エ後^ゴ國^{クニ}の海^{ウミ}浪^{ナミ}人^{ヒト}ハ山^{ヤマ}崎^{サキ}海^{ウミ}十^{ジュウ}郎^{ロウ}享^{キョウ}保^ホ二^ニ十^{ジュウ}年^{ネン}とあそびてあそびてあそびてあそびてあそびて

ヤッマリ
中一八十餘歳と云ふ事あり。黄龍寺と稱する法名西雲一水禪定
門より派十郎女子一萬子早世して後分りし事あり

御嶽山と稱して藏王宮あり。関口能登守信忠建立泰昌月八日別堂行正院

阿彌陀田村

此村東山方村西小石成村南小関合堰合より古村あり。家貞本三戸今十二戸
あり。阿弥陀如来堂あり。さるゆゑなり。村名とせり。清和と長太郎より
家の砌小涌て南小流る泉より掃部林より山長者より園子の林あり。村
森田掃部ハじりハ弟太郎ハ掃部スミ吹簫のやう谷二隅て空堀の邊不降く
住し。その乾堀ハ伊長子兄中より君び込て居るけり。関口九助が
うちより掃部ハ森田善吉思て此色ハ在り。此事鎌鋒カマバネの圖あり
る事ハ此記より里長柳崎共治兵衛此村ハ柳崎氏ハ本ト

信濃國、注良人より清和源氏の流之。二代景家柳崎和泉守天正
五年十二月七日越後國より録信の討手と受てり。死す。其二男景範
隼人より越後國四日市場少将より旗上りて同國下山田より
慶長五年討死。法名阿弥陀田居士其子因獄信判八代
住居より上祖景作柳崎伊豆より慶長五年出羽國平康郡馬鞍村
に来り身尺六尺六寸力人ハ勝り寛文十二年乙亥正月十六日故。法名越出羽住
信士。二代景畠弥兵衛より藤吉より元禄十三年庚辰十月朔日故。
法名道安禪定門一男景七三藤兵衛より亀田村ハ分家二女采女
室ニ。三代景中勘太郎より共治兵衛より林左門ハ男ハ女子
あり。共治兵衛室ニ女子保世年乙卯三月十八日故。四代景三長吉より
共治兵衛より實采女ハ長子ニ寶曆五年乙亥八月十七日故。

十六歳で初めより老人と六十二でうきうきしてゐる松明を
うちぬいて金屋村の人と醍醐村の若神社の前小群れりて醍醐焼
れり異に同音叫び傳松やう醍醐村にもあやうさは松明より
て金屋の若神の前より来て金屋やけりいづれのもう叫びてもハ
お合組あがいでいすゝい今よりして老い出ますゝあやうさのむれ
りて醍醐やけりかや焼きやう村に入達して若神のむら前小火で
高き焚てあびふさいのうけのこ是かさい原けりう方稲田不佃
あひて年の古例せしけりさ海よりいづれ其は海之河の瀬の葉原の鬼奈や似る

山方村

山方村といひ近き世から出来つた村九戸のやうなやうな家も
伝説よりいづれと里長村崎共治兵衛景塘人あまうて足して

湖水やとろり小ぼき水田の新墾して百斛餘を耕けるその
この縣令で山方善兵衛といふあつて此土の勤功なり其の世
までもくもれりあれぬ科より山方村より石付といひ此村崎氏が
ひききり大池の道廻神山の下小あつて此村崎氏永無二年の頃や
柳崎九郎大門と浦惣右衛門といふと山守とあつて住みし
これを二ッ屋村といひは後より甚ゆ九郎とてまゝ二人より住て
二ッ屋も四ッ屋も成りてあづはるこあ在りて享保のころあひさる
阿弥陀田村より移り住めば二ッ屋村の原て其源は今大池といふ
二ッ屋池といふ依太郎といふもの此池より水虎を捕へて死する事あり
その霊魂を参りて岐小石碑を建て其石面を祀祭と町てその下小
九郎の惣右衛門九郎大門といふ市より新てまゝ向う右の方小増田田

子田道なり武道平澤道北方新堤取立典治兵衛在たの門兵衛
勘助喜せし時了す人是以五千餘人築立とる一文化十一年十月
六日を刻し此池むいはいし深くて七八間計四方草生い池地の如
くしをむき築て今も水いり廣く水心涼くて鯉鮒なども
大やうめりすありし此直七十間四方けり堤築といり

字所古名

藤蔓所 谷地小屋 内野目 町後 そは藤蔓の
西の方か いづれ城あり

むいの名あり 貝館山ハ陣螺吹とてはく澤山の奥より弟
太郎が住りて 鳥池山とあはれむむむいの方なりそハ
鯨波山とむい寄マキの岡上とてはくやうこととハ中
きのうとてい 誤りけり

馬鞍の軍まのあはれ

永慶軍記せ七巻山北馬鞍ニ洛城といふとふ小野寺遠に守
義道湯澤の城とて攻めしといふ豊前守満茂が戦ひ負て人
散れし其後を討て出むとて一向横多の小城とて楯籠り刺
一門郎黨共殊勝が来りしとて小野寺の郎等とて要害を攻落
事隔れ湯澤近邊に川熊植田今泉新田目鍋倉の五城満
茂とて居り此小馬鞍の城を攻めし三千餘人とて一岩崎古内
増田の岡に陣を敷て翌日四月十九日馬鞍村を寄りける此城後
と深山に維き大木透間も無く生ひ茂て一片の白雲とて峰とて
左右の谷深くて万仞の青岩路を遮り攀折の坂を揚る事二里
降る本丸より下三方小敷百軒の役所とて作る並べあり小櫓とて上げ

か大堀と堀と矢羅升虎落丈夫かりて大勢の勢とていふて
色々の旗のなり吹貫數十本本との指の翻る翻る形勢
雨より花より疑る寄るの姿波より馳加て五千餘人三方で取
圍りて回して作り矢銃砲を放つるをも城中證るものて言ふべ
寄手勝小来て三方の堀際まで我より攻め寄るを馬倉能
登守同右兵衛尉此とて擬議せし其事柄勇銳多兵と一戦
小手次の役で見せしと諸卒小下知し櫓の上堀の狭間より矢銃砲
を放し小打出せば寄る或は討き或は手負懐へ兼て手斬り引
退く城守の兵時分りしやと思ひけし大手の城戸押開き三百人すの
おとくに寛出る寄るの兼て期しる事なれば態陣と二つに分て
引包み討取むとてふるは城の勢兵究竟の驅武者にて是で

事とせむ真一文字小駈破る穆公ハ足し是ふハ幸増ふ事
中も馬倉惣兵衛同縫殿丞杯云兵共日東聞えし剛の者も身
命を塵芥とも輕しと矢銃砲を不忌敵に向て勇むこと念柳
子しかる中も馬を名譽のつ物に縦横無礙小衝り廻り日東ハ鬼
神とせえし最上勢防が兼て是とければ寄手の大將豊前守伴
良子大和守足輕大將熊澤尊人同山家因幡須藤無木林
馬と直直に續け者どもを引止まんと知しければ一陣破れて
陣黨不全大勢引しらぬ遂に返り不合岩崎まで引退し暫
時の軍小定竟の無力を拾餘騎討れ其外は輕歩者等數々
追打ちにせられけり原田大膳大將の前より出て掠今日の軍小味方敗軍は
事敵僅の城小勢の貌を見侮て是程まで追うちしれ小敵と欺

いへば先横手の本城おつゝて此城を敵に渡し一守まで持返さん
も思案して宵を女中や大谷の方へ送りける幸敵遠引て
此一方の道開けば雑兵下部も秋先も送りける尻将も大将馬
倉右衛門尉同宗今熊谷左門工藤金助依宗九郎は是十六
騎靜小馬を歩せり。抜掛けの者ども是と見てすつや敵を放れ
遁さどろ六拾余騎追わけり十六騎の者ども先へ落し者共一足
も走さんと引殿し事なれば敵て支ひ多の一度小馬を引返し
響て並て馳向ふ然も今春四月廿日短夜と更て月隈かく武の
貝の色もあざやうに見え多しと入乱き左衛門深手負て倒し
とある當度ふ討て死にありされども多勢ふ少勢と十六騎
の者ども十二騎は討てきて大将共ふ四騎北へこゝて送りて捕計せ

めむ追わけり。夏ふ馬倉の百姓小次郎太郎といふ者あり。思皮の
貝足に着て三尺餘の長柄ふ刀も三尺有りけるを折振て大将の
馬の腹ふましが取返し追来り敵と三人まで切て落し。里見は二
郎悪い奴と云へば鐵取の金室へつゝ。弟太郎心得りて
飛入ておけるに里見ら手の肘で折落さる山崎藤十郎透さば
折てうも弟太郎長柄中より抜き折ければ飛入てむむと但し山
崎多き下へ成るされども早業をいれれば下より刀をぬいて弟太
郎が腹の下へ指し通し。その返し其後首を捲きかけ馬倉四騎
の兵も數々手負ぬれば小栗宮内討取ける漸夜も明ければ豊前
守満茂味方の軍兵抜かけせし事とす。三千餘人を率し馬
倉へを寄つけり。されども落城の後へは主甲斐の如く城中へ入り

伊良子將監をこの置きより抜ぐの者共討取る首實檢し勝時を
作り湯沢へ敗陣して軍の次牙飛脚を以て最上殿へ住進せられ
けり之を以て山崎藤十郎小栗宮内高名公事ノ事ト云條ハ
今度馬倉三洛城守諸勢最上小歸陣の後山形旗本小栗宮内
と山崎藤十郎高名公事ハ及び事ハ其子細と山崎藤十郎
ハ弟太郎ト云百姓の首で取る小栗宮内ハ馬倉城主右兵衛尉ハ首
で捕る其外高名ト云の事ハ義光委細目付の者の按察
でつむいて感状褒美や賜ふ事ハ感状の表勝ハ
小栗宮内と山崎藤十郎ハ何れも甲てぬぞ是と云けり小栗
大將の首捕り故最上之山崎と土民の首取ふ何事ハ感状の
面ハ小栗ト云らばハ何事ハ是主君の御諒多クハ小栗

最上原の者ハ評判ハ山崎方ハ是の事ハ小栗大將の首で捕り
も数ヶ処の原野多ク討り又弟五郎ハ大力の曲者ト味
方で四人共打取其上ハ味方小討でかゝり但討かゝるハ山崎こそ増り
多ク云つて何事ハ成りかけ義光西方の原上とすははハ小
栗山崎ハ討決と云ふと召出さる固山形の一門最上ハ谷で
得て武功の者ハ武者大將足輕大將等の諸役人等と時々その
座ハ左右小列を以て陣中我々各々通し心かけ大將討捕
ハ何事ハ云ふ事ハ敢て陣中一人の高名ハ不存
馬倉三洛と云ふ者ハ高橋武太助川田三右衛門最上ハ中ハ
果々馬倉ハ腕ハ鑓ハ武者大將ハ馬と云ふ川田ハ手負
候如此十六騎ハ味方ハ拾騎と云ふ三驅破ハ強ハ候ハ皆

義光を盲の奇くあかき也則首を刎ぎ者おれり度々の軍に
忠功ありしものあれば死罪を免して所領を召放ししを宣ひける義光諸
役人の對して今度馬倉合戦お若山崎敵の目利て第五郎と土氏之強敵
候事駭合討死をも土氏小討事不覚に能敵不達て了れ後までの高谷
とて思案ふ及ば弟太郎を討つるに敵一人剛の者あれば味方百十の備へ破ら
き味方小強きものあれば敵は敗軍の時二人弱兵つれて千方の強兵むけ
く成事御違尋存の前之敵深傳ふ毒陣者い不戦善戦者不死といふ山崎
敵の目利をせむ身と捨て土氏第五郎と但故下小成るといふも首を取事
校群の自柄に準之思ふに軍見作二郎が討死高谷山崎同前といふ宣ひしに
最上家の挺か改て敵の貴賤剛臆と題て高谷の品と云ふれこれ柄に案無金高谷
公事お穿入より前非で悔山形の光明寺入て訴訟かたふ本領を返し賜りけりといふ

永慶軍記廿三卷於馬倉最上勢敗北事いふるより湯澤
豊前守難登典膳今日柳田城事故り攻落しといふ大森
城強くて味方大勢是れ攻飽對陣も其勢を配分して吉田で
攻むるも境の軍お打負ぬといふ城一箇を攻むも容易なる
所い湯澤と攻落じし思へとも西馬音内山田松岡の者も後攻
せ難儀多しといふ若又遠くは働りハ其隙を近所の敵も
伺ふといふ會議評定して豊前守と湯澤お存て難登典膳
長子式部少輔同新藏三百餘騎といふ十月二十三日馬倉を向ひ
ける増田も昨夜飛脚を以て謀合せりといふ長瀨内膳進光陰
八十騎して駭かす惣勢五千餘人馬倉表お打臨み三方より城を
巻て圍り作り攻め迫り城主関口能登守先年此城を落し

右兵衛尉討死す事には惜し思ひ漸くして攻返し再び安堵
す事あり今此城を敵に渡してたまふ代までの家の疵を望み敵強
く一人も残るべし討死せよとて誰の面を合せしと諸卒を勇むる
一門關口備中同九助同友京其外嶋本左馬次同山目圖書同伴
重一昨日横手より加勢として来り此城にけり此由ですも
最もかこを首へけり我々が持に堅固をを防ぎける最上勢一
旦小攻入む今も惜まじ見えけきども元來地の利金城より
柵鹿垣密に結び堀峪石巖の切立僅か通路容易き処あ
れば路を堀切穿て構へて橋を架し溝を深し櫓をあけ
けき並べ鉄炮上千弓の精兵で勝りて遠き敵で射
落せば寄るに手負討死しども城方は堅固にして攻め今

づきやうもや一室に難食典膳郎等高橋第五郎 同
第三郎兄弟一隊に乗出被りて我が鉄炮大あり玉のあはれ
は流れゆく武具のうらわに思ひも思ひぬ近き打寄て悪
すふ氣短から奴京定て出たりし事有るなり其時突進して敵
を薙り出し味方心地も軍をさうふむと云ひ堀涯近く押し
つの大音上り城内の者どもはら鉄包の腰ぬけ業々日と暮るるを
最上の者の手並を見えて臆病神の離れざるや迎此城今日復
む柵の外よりわがひも誰より我々兄弟が手よりけて一首を打
落し此世の隙をあけて取らむとて内悪にけれども日暮るまで
討て出いせども同答も有るなり其上城中小石田坂右門三郎
とて鉄包は上年の物の際より懸ひ寄て堀越しか

勅と打無惣やか第九郎胸板で打貫れ馬より下ふ落まり
第九郎馬より飛下り足で引立肩不掛へ皈りむき多き石
田坂又鉄包で打ちきば今度足才共不貫れ遂にこゝに死
かけりかくのごとく鉄包の軍のとき其日の軍に果けりされし伊
良子式部少輔春熊回新蔵春親手の首を近付け去る年兄和州
此城より云ふ甲斐り討られれば此城主と敵られし就て此城の
案内鉄包より外味方知者有るべしと倡やむび入て火をかけし其
時味方同攻め入る今春此城疑ひありしが即ち最もふれし打
詰りしと急ぎ急ぎ路を廻りむし味方小隊合せ究竟の若者十一人を
勝つて這の山路小徑めづれいまし時と申の刻なり其路松柏
透間ぬく枝々ありて馬うつり不貫れの中と七八町分りて

乾堀の所をけり柵降り打臨けり突ふりて時をうつり育の裡ふ
火をうけむし松詰きて栗研のやうなる乾堀の底まで居び居る
妙ふ城の大將能登守が諸父足才不関に九郎と不物小則とる
兵あり今日の奇多の中不伊良子兄弟あり此城の案内能登り
つる者ありし一後日山より居び入る事りやれむし兼て番の者
とバ置きしれ難所を頼む要心ある事有る下其ま諸本問かけ
きバ一二及て隔てハ見付る事有る下思ひて用心のふし輕二十
隊人小鉄包で持せ敵の居び入るべきと思ふ所ふ心で付て打廻りし
此由と此を見澄し是輕兵ふ目如せまれば打詰り鉄包の精先き
汰つて打かけし敵の中より大將春熊目早き男あり鉄包で打るに
大死をぬき太刀ぬき側の乾堀よりわけ上りしければ思中とて此

まで并置し其後、こゝに倒れけりされども春親が始め玉ふ逃れり者
 ども三人かけ上て一所小太刀を被側の柳畜迅の勢い唯一助ふ切てか
 る中から新藏どが圓口九郎持りて鏑めて了と突郎守二人鏑
 眼まれば新藏をこめて討たけり残り二人の者どもを輕共ふ取り
 籠らき回場めて討たけり九郎と討取首數ともたせ城中小入れ
 能也守を事限りり此上と敵を謀て還て勝利を得む事
 尤安しと俄ふ人数立手か分ケ幸ふ大手西の堀涯小紫を積置
 しふ火でかけ遁が餘もな何れぞ波ぞと関て作り駭き敢へり
 寄手是を見て伊良子こそ仕めせ多く城中小火の事より攻
 入しとふ候ふ五千餘人の備へ散礼して我一番乗せむと駈近づ
 馬倉惣力元來多しなり事なれば三方より鉄包をうちかけ左右の山

の腰廻りて敵の後を遮む。岡を所押寄れば最上督按ぶ。遠
 して横手より後攻来る。賞する。後を遮る。退て戦ひ。崩れ
 きて逃る者過半あり。是より。岡口能登守。回備中。回。在京。五百
 餘人の糧卒志を回して。岡を同じ。噴と。此の。寄の。足陣に
 むかれ。む者ども。忽ち。東西。辟易して。追前する。されば。長瀬
 内膳も。佐々木。典膳も。日東。鬼神のや。ふられ。今日の。合戦。大か
 ら。換。増田。岩崎。まで。いふ。ける。是。長瀬。魁登が。不。覚。あり。と。
 諸。卒。嘲らむ。と。ある。事。あり。と。是。より。真。考。ふ。岡口。能登。守
 某。再び。本城。へ。居住。して。慶長。五年。と。な。六年。まで。在。り。が。七
 年。は。遠。邦。の。も。と。ある。ふ。力。を。寄。せ。今。角。間。川。の。岡。口。氏。あり。と。ハ
 馬。鞍。家の。後。胤。と。い。ひ。ま。雄。勝。郡。馬。場。村。椿。基。村。の。山。郷。と。入。り。て。
 十ニカト

関口統^{トノミト}其家士^{ツリ}あり田^{ハナケ}を佃^{ヒラキ}て其後^{スエ}と云
ゆる正月式^{トシノハジメ}より^{タメシ}の古例^{ヨル}ありて寄^{ヨル}りて^{イニ}禁^{イニ}て寄^{ヨル}せ
る^{ムカヒ}厨^{ムカヒ}てふりの^{ムカヒ}食^{ムカヒ}さる^{ムカヒ}あり

修驗者行正院歴世

貴峯山行正院皇祖形藏院明快ハ俗姓神原形部某と
いいて陸奥國糠部郡水澤の人ニ永禄三庚午出羽国平康郡
馬鞍郷小来て小野寺遠江守義道公家中関口能登守殿藏
王権現の社建立ありしとき神原形部山伏より^{ツケ}り別當職
小作^{ツケ}りありて田畑^{ツケ}せ石^{ツケ}條^{ツケ}り當院小属^{ツケ}り明快天正十九年辛
卯正月遷化二世行藏院省永元和二年丙辰二月十日化三世
行藏院快藏嚴當村鎮守三嶋八幡宮別當より寛文七年丁未

曆
九月廿九日化 四世觀行院快元正徳元年辛卯六月廿四化 五世
行正院快行寛保三年癸亥十二月廿九日化 六世觀行院
快山寶曆十一年辛巳二月廿六日化 七世行正院快見文化二
年乙丑閏八月廿九日化 八世大寶坊快省寛政九年丁巳
四月四日化 九世現住行正院快栄ニ

黄龍寺

鷲峯山黄龍寺ハ増田満福寺末院なりて満福寺七世
食室天悦和尚より開祖より此寺山北立龍寺の内の一山なり
開祖天悦和尚元和五年己未二月二日遷化 二世超岸梵越
和尚年号不知正月二日化 三世骨山良髓和尚寛永元年
甲申三月四日化 四世風山點淳和尚寶永五年戊子五月

四化 五世山翁大秀和尚享保十年己巳正月廿日化 六世哲
周道光和尚元文三年戊午八月廿八日化 七世悟山太愚和尚
延享二年乙丑二月二日化 八世愚光即癡和尚寬延二年
己巳十月九日化 九世果林即成和尚寶曆九年己卯二
月朔日化 十世寶山自隨和尚明和二年乙酉十二月五日化
十一世龍睡了穩和尚寶曆十三年癸未十月十日化
十二世大拙東海和尚安永五年丙申五月十一日化
十三世玄法袒閑和尚天明四年甲辰七月十五日化 十四
世德翁密隣和尚文化十五年戊寅正月晦日化 十五世
鉄翁鶴枝和尚寬政七年乙卯八月十五日化 十六世石腰
確翁和尚文化元年甲子正月廿日化 十七世秀雲白山峯
麟步現住也

家員百三十拾戶

人員六百四人

馬七十三足